

小学校国語教科書教材基礎研究：  
「アレクサンダとぜんまいねずみ」の考察を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00010265">https://doi.org/10.14945/00010265</a>

## 小学校国語教科書教材基礎研究

——「アレクサンダとぜんまいねずみ」の考察を通して——

A Researching Leo Lionni through Japanese Language  
Teaching Materials “Alexander and the Wind-Up Mouse”

大塚 浩

Hiroshi OHTSUKA

（平成28年10月3日受理）

### はじめに

レオ＝レオニ（1910～1999）は、1910年5月5日にオランダ・アムステルダムで、父ルイス（ダイヤモンド技師で後に公認会計士）と母エリザベト（後にオペラ歌手）の間に生まれた。叔父のルネは、現代芸術のコレクターで、ピカソ・ミロ・シャガールらの作品を数多く所蔵しており、レオ＝レオニは、身近な存在として現代絵画と接する機会を得ていた。12歳までアムステルダムで過ごしたレオ＝レオニは、幼少時から近隣のオランダ王立美術館に通ったり、自然に関する物を集めた小動物の庭を作ったりするなど芸術と自然に囲まれた環境で育った。その後1922年に、父親の仕事の都合でベルギー・ブリュッセルに移り、2年間を過ごした後一家はアメリカ合衆国に移る。1925年イタリア・ジェノヴァに移り、工業大学に入学。1928年から2年間、スイス・チューリッヒ大学で経済学を専攻し学位を取得する。1935年イタリア・ミラノのモッタ社の美術主任として2年間勤務の後、フリーのグラフィック・デザイナーとして活躍する。1939年7月5日にイタリア政府が「人種法」を公布したため、レオ＝レオニ一家はイタリアを離れることを余儀なくされ、1939年にアメリカ合衆国に移住する。レオ＝レオニは、フィラデルフィアの広告会社に入社し様々な仕事を手掛け実績を残した。その後、第二次世界大戦が終結した1945年にアメリカ合衆国に帰化した。

1948年に一時ヨーロッパに移った後アメリカ合衆国に戻ったレオ＝レオニは、フリーランスのグラフィック・デザイナーとしてオリヴェッティ社や「フォーチュン」誌の美術主任、パーソンズ・デザイン学校のグラフィック・デザイン部長を歴任した。1953年には、ニューヨークで個展を開き、その後もアメリカ国内やヨーロッパ各地で個展を開催している。その一方で、アメリカ・グラフィック・アート協会会長、アスペン国際デザイン会議委員長を務め、1955年には全米アート・ディレクターズ協会・最優秀アート・ディレクター賞を受賞している。

レオ＝レオニは、1959年に『Little Blue and Little Yellow』で絵本作家としてデビューする。その後1999年に没するまでの間に、『Inch by Inch』、『Swimmy』、『Frederick』をはじめ数多くの作品を世に出している。特に、1964年に刊行された『Tico and Golden Wings』は、アメリカ図書協会最優秀作品として指定を受けている。続いて1968年に刊行された『The Biggest House in the World』は、児童図書スプリングフェスティバル賞及びBIB金のリンゴ賞を受賞

する等の大きな功績を残している。没後の2004年には、デザイン分野で秀でた業績が認められてAIGA賞が授与されるなど、アメリカ合衆国において最も活躍した芸術家の一人である。

レオ＝レオニ作・絵による教材「アレクサンダとぜんまいねずみ」は、昭和50（1975）年好学社より、レオ＝レオニ作・絵、谷川俊太郎訳の絵本として発表された『アレクサンダとぜんまいねずみ ともだち みつけた ねずみの はなし』を底本としている。原作は、1969年にPantheon社より発表されたレオ＝レオニ作・絵による『Alexander and the Wind-Up Mouse』である。

小学校国語教科書教材としての「アレクサンダとぜんまいねずみ」は、昭和55年版の教育出版（小学2年生用・下）をはじめとして、以後長年掲載され続けている。また、大阪書籍においても平成元年度版から平成6年度版まで掲載された。

そこで本稿では、「小学校国語教科書教材基礎研究」の一環として、レオ＝レオニの作品「アレクサンダとぜんまいねずみ」の考究を通し、作家レオ＝レオニと訳者谷川俊太郎、ねずみのアレクサンダについて、ぜんまいねずみのウイリーについて、二人の出会い、について考察を進めていくものとする。

## I. 作家レオ＝レオニと訳者谷川俊太郎

### (1) 作家レオ＝レオニの誕生

レオ＝レオニは、1959年に初めての絵本『Little Blue and Little Yellow（あおくんときいろちゃん）』をアメリカ合衆国で出版している。この絵本は、従前の絵本の世界に新しい風を送った作品であり、レオ＝レオニの代表的な作品の一つである。レオ＝レオニは、『Little Blue and Little Yellow』の成立過程について、次のように述懐している。<sup>1)</sup>

あれはある木曜日のことでした。ニューヨークでは木曜日は九時まで店が開いているので、妻がよくこの日に買いものに出かけた。その日、先に孫たちを連れて帰ってくれと妻が言うので、まあ連れて帰った。ところがわたしはこどもを扱いなれていないものだから、どうしたらこどもたちをおとなしくさせることができるのかわからなかった。その時たまたま『ライフ・マガジン』誌が手元にあって、その中の広告ページの青い紙と黄色い紙をちぎってかれらに話をつくってやったのです。ガッカリされるかもしれませんが、きっかけはこんなことだったんです。(笑)で、家に帰ってから、結構いい話ができじゃないかというのでさっそくダミーをつくってみた。たしか、つぎの土曜日だったとおもいますが、友人が夕食にやってきて、その友人というのが子どもの本の出版社の編集者になったばかりだった。それでダミーを見せたところ、かれが「それ、出版します」とひとつ返事で。(笑)ぼくにとってはそれがはじめてのこどもの本になった。

レオ＝レオニの処女作『Little Blue and Little Yellow』は、レオ＝レオニが自分自身の孫たちをあやすために創り上げた作品だったのである。この作品の原点は、手元にあった雑誌の「広告ページの青い紙と黄色い紙をちぎって」、即興で孫たちに話して聞かせたものであったのである。その後レオ＝レオニは、絵本作家として数々の名作を著していくことになる。

レオ＝レオニは、「子どものための本」について、次のような考えを吐露している。<sup>2)</sup>

子供の本を作るのは私にとって大いに楽しいことです。多分これは、子供や親たちにこういう本が好まれる理由なのでしょう。私は他の仕事をしても、同じように楽しんでいますが、今になって、これは物事を十分に良くやる、ということから出てくるのだとわかりま

した。しかもできるだけ良く、です。

私はアイデアや言葉や絵が相互に働きあい、相互の効果を高めあう様な統一したまとまりを作ろうと努めます。このまとまりに達するのが私にとっては重要なことです。それですから私は自分の言葉を描写する絵を描き、また絵を語る言葉を書くのです。どちらが先に出てきたのかは思い出せません。私の頭の中では両方ともが、私の物語を産み出すアイデアの一部なのです。( 中 略 )

私は社会的意味のあるアイデアに興味をもっています。人間の重要な問題を簡単な言葉で述べるように努めています。意味のない物語はつまらないものです。それはお話しても楽しくありません。

ここでレオ＝レオニは、自らの作品において「アイデアや言葉や絵が相互に働きあい、相互の効果を高めあう様な統一したまとまりを作ろう」と心掛けると共に、「このまとまりに達するのが私にとっては重要なこと」であるとして、作品創作における「アイデア」・「言葉」・「絵」の三者を一つに纏めあげる上での要諦を明らかにしている。レオ＝レオニは、自らの思考の中で「自分の言葉を描写する絵を描き、また絵を語る言葉を書く」として、作品本文と挿絵がもたらす相乗効果の重要性を指摘している。小・中学校の国語教科書に収載される教材では、作品本文と挿絵の作者が異なる場合が大多数を占めている。こうした中でレオ＝レオニは、作品本文と挿絵の両方を書き上げる数少ない作家の一人である。

## (2) 訳者としての谷川俊太郎

レオ＝レオニの作品の多くは、詩人・谷川俊太郎によって翻訳され、日本の読者に広められている。谷川俊太郎は、『せかいいちおおきなおうち』、『フレデリック』、『さかなはさかな』をはじめレオ＝レオニが出版した約40作品の絵本のうち22作品を翻訳している。谷川はレオ＝レオニについて、次のように述べている。<sup>3)</sup>

絵本作家としてのレオ＝レオニに初めて出会ったのはずいぶん前のことです。“Little Blue and Little Yellow” (邦訳題名 あおくんときいろちゃん) は、たしかにひとつの新鮮なおどろきでした。絵本作家という存在が、本質的には絵かきであると同時に詩人なのだということを、その本は私に気づかせてくれたのです。

レオニのちいさな主人公たちの前には、いつも広大で多彩なこの地球上の世界がひらけています。そういう現実への信頼感が、レオニのイマジネーションを豊かにしている。そこに単なるおとぎばなしでない、彼の作品がおとなにも楽しめる理由があると思います。

翻訳にあたっては、原本のもつ視覚的な美しさを損なわぬことを、まず第一に心がけました。文章のレイアウトを、できるだけ原本どおりにするために、その内容の一部を省略せざるを得ない場合もありましたが、これは俳句的な凝縮された表現を好む日本人には、かえってふさわしいと考えます。

谷川は、「絵本作家という存在が、本質的には絵かきであると同時に詩人なのだということ」を気づかせてくれたのが、レオ＝レオニの作品『Little Blue and Little Yellow』であったと述べている。レオ＝レオニ作品の翻訳にあたって谷川は、「原本のもつ視覚的な美しさ」を損なわないことを第一にしたと留意点を明らかにしている。また、原作を大切にしながらも省略せざるを得ない場面の翻訳は、「俳句的な凝縮された表現を好む日本人には、かえってふさわしい」のではないかと述べている。谷川は、原作の持つ良さを生かしながら、読者である日本人にとっても受容しやすいように言語表現を工夫しながら作品の翻訳を行っていたのである。

谷川は、レオ＝レオニの作品中における主人公たちについて、次のように述べている。<sup>4)</sup>

レオ＝レオニの絵本の主人公たちは、いつもほんの少しずつ私たち自身なのだとと言えるでしょうか。彼等のかしこさやおろかさには、どこか思いあたるふしがあって、そこに私たちが彼等に親近感を抱いてしまう理由があるようです。

魚や虫や小動物を愛するレオ＝レオニは、もしかするとそれ以上に人間を愛しているのではないのでしょうか。そこに私は、作者の生きるものに対する優しさを見ます。イソップの伝統を受けつぐ批評を秘めながら、レオ・レオニは何よりもまず生きる喜びを大切にしています。

谷川は、レオ＝レオニの作品中に登場する主人公たちを、「いつもほんの少しずつ私たち自身なのだ」と指摘している。それが、作品中の主人公たちに、読者である私たちが「親近感を抱いてしまう理由」であると考えている。また谷川は、作品の主人公の姿に「作者の生きるものに対する優しさ」を見出すとともに「レオ＝レオニは何よりもまず生きる喜びを大切にしている」と捉えている。

邦訳された多くのレオ＝レオニの作品は、作者であるレオ＝レオニのものの見方・考え方と翻訳者である谷川俊太郎のレオ＝レオニ作品に対する深い考察力の融合によって成り立っていると見えよう。レオ＝レオニの作品の持つ魅力と谷川の翻訳とが紡ぎ合い、一体となって重層構造を成すことによってはじめて読み手の琴線に触れるテキストが産出されるのである。

## Ⅱ. ねずみのアレクサンダについて

### (1) アレクサンダの日常

ここでは、作品中に登場する「ねずみのアレクサンダ」の人物像について考察を進めていきたい。作品本文では、アレクサンダの日常生活について、次のように記している。<sup>5)</sup>

「たすけて！ たすけて！ ねずみよ！」

悲鳴があがった。つぎには、ガシャン、ガラガラと大きな音。茶わん、おさら、スプーンが、四方八方にとびちった。

アレクサンダは、ちっちゃな足の出せるかぎりのスピードで、あなにむかって走った。

この「悲鳴」は、ねずみであるアレクサンダの姿を認めた人間が驚き、恐れ戦きながら発した言葉である。「ガシャン、ガラガラ」という「大きな音」は、アレクサンダの出現に驚いた人間が思わず落としてしまった食器の音であったり、人間がアレクサンダの息の根を断つために、標的目掛けて投げられた際の音であったりする。「大きな音」という言語表現からは、食器などがアレクサンダに向かってもの凄い勢いで投げられていたことを窺い知ることが出来る。

何故人間は、アレクサンダにこれ程まで過剰に反応し、執拗に攻撃してくるのであろうか。

それは、当然のことながらアレクサンダが「ねずみ」だからである。ねずみは、愛玩用や医学実験用となる種も存在するが、多くは極めて有害であり、農作物・食料品・樹木などを食い荒らしたり、家財を破損させたり、病原菌を媒介とする動物である。人間にとってねずみは、有害な生物であり、即座に駆除の対象なる生物なのである。作品中におけるアレクサンダに対する駆除方法は、作品の冒頭部に描かれている茶碗・皿・スプーン等の食器を投げる行為、後にアレクサンダが冒険譚としてウイリーに話す内容として登場する箒・鼠捕り器などが挙げられている。こうした人間からの攻撃を回避するには、「ちっちゃな足の出せるかぎりのスピー

ド」で走って逃げるのがアレクサンダの唯一の手段であったのである。

## (2) アレクサンダの疑問

人間の攻撃から必死に身を守る一方でアレクサンダは、「何故、自分がこれ程までに人間に嫌われるのであろうか。」という疑問を抱きながら、日々の生活を送っていた。作品本文では、アレクサンダの疑問について、次のように記している。<sup>6)</sup>

アレクサンダがほしかったのは、一つ二つのパンくずだけ。それなのに、人間は、かれを見つかるたびに、たすけてと悲鳴をあげたり、ほうきでおいかけたりする。

ここでアレクサンダが訴えるのは、「一つ二つのパンくず」のみを所望するだけの自分自身を、「たすけてと悲鳴をあげ」て大袈裟に毛嫌いし、しかも執拗に「ほうきでおいかけ」回したりする人間の理不尽さに対してである。アレクサンダは、いつ何時人間から攻撃を加えられるか判然としないため、常に臨戦態勢を維持し続けなければならず気が休まらない。しかしながら、ただ人間から遠ざかれば良いというわけではなく、自分の生命を維持するために時には危険を冒してまでも食料調達のために行動する必要があったのである。

また、アレクサンダは、自分と人間との関係に疑問を持つ一方で、「孤独」を抱えていた。アレクサンダは、「かくれ家のくらやみの中でひとりぼっち」でいることから、一人きりの生活を送っていたことが推測される。アレクサンダは、人間から毛嫌いされ常に危険と隣り合わせの生活を強いられるだけでなく、苦楽を分かち合ってくれる「他者の存在」を持ち合わせていなかったのである。

## Ⅲ. ぜんまいねずみのウイリーについて

### (1) ウイリー像

作品本文では、アレクサンダとぜんまいねずみのウイリーとの出会いについて、次のように記している。<sup>7)</sup>

ある日、うちじゅうがるすの時、アレクサンダは、アニーのへやでキーキーという音がするのを聞いた。しのびこんで、かれの見たのはなんだと思う？ もう一びきのねずみさ。でも、かれと同じようなふつうのねずみじゃない。足のかわりに、二つの車がついていて、せなかにはねじがある。

「きみ、だれ？」

アレクサンダは、きいた。

「ほく、ウイリー。ぜんまいねずみ。アニーのお気に入りのおもちゃさ。ぜんまいをまくと、ぐるぐる走るんだ。みんなちやほやしてくれる。夜になると、白いまくらをして、人形とぬいぐるみのくまの間で、ほくねむるんだ。みんな、ほくをかわいがってくれるよ。」

竹内みち子は、この初対面の場面から、ぜんまいねずみのウイリー像について、次のように述べている。<sup>8)</sup>

ウイリーは、アニーのお気に入りのおもちゃで、人間がねじを巻くと走る。ぜんまいを巻いてもらわなければ動けないし、「ぐるぐる」という表現から、同じ所を回るだけで、自分の意思と力で走り回れるアレクサンダとは、まったく違う宿命を持ったねずみである。もう一つ、ウイリーは、アレクサンダと大いに違う点を持っている。それは、「みんなちやほやしてくれる。」と言っているように人間達にかわいがられているのである。が、ちやほやというのは、相手を甘やかしたり、機嫌をとったりして大切に扱うことで、真実味のある対等な愛し方愛さ

れ方ではない。「みんな、ぼくをかわいがってくれるよ。」という表現からは、主体的にかかわっているのではなく、受け身な生き方で、ウイリーも自分の立場に十分満足しているわけではないことがうかがわれる。「キーキー」という音は、ぜんまいの音だったのだ。持ち主のアニーが、ねじを巻いたまま、出て行ったのだろう。遊び相手のないまま、キーキー動かざるを得ない。いや、自分で止まることもできないのだ。

ここで竹内は、ウイリーについて二点指摘している。一点目は、ウイリーは他者に「ぜんまいを巻いてもらわなければ動」くことができず、動けたとしてもその行動範囲は「同じ所を回るだけ」であること。二点目は、皆に「ちやほや」されて、「人間達にかわいがられている」ウイリーであるが、「自分の立場に十分満足しているわけではない」ことである。竹内が言うように、この時のウイリーは「キーキー動かざるを得ない」のみならず、自分自身の意思で「止まること」さえ出来ない状態であったのである。

また西郷竹彦は、この場面の話者の視点について、次のように述べている。<sup>9)</sup>

話者がアレクサンダの目と心によりそって語っているのです。＜しのびこんで、かれの見たのはなんだと思う？ もう一びきのねずみさ。でも、かれと同じようなふつうのねずみじゃない。＞という具合に、アレクサンダが、対象であるウイリー、ぜんまいねずみを認識していく過程が順次書かれています。これが読者に対しての仕掛けにもなっているのです。

西郷が述べているように、本作品を読む読者は、アレクサンダと同じ視点でウイリーを認識していく。アレクサンダの目の前のウイリーは、この時一人でぐるぐる回っていた。おそらく、アニーはウイリーよりも別の何かに興味を抱き、或いは家族の誰かに呼ばれて急かされた末に、ウイリーを放り出して思い切りよく扉を開け、部屋を飛び出して行ってしまったのであろうか。

急に放り出された寂しさの中、一人取り残されてぐるぐる回っていてもウイリーは、楽しいはずなど決してない。いつになったら止まる事が出来るのであろうか。アニーは出かけていったのに、自分と一緒に出かけることは出来ない。ウイリーが「自分はアニーのお気に入りなのに……」と虚しく思っていた所へ、開いていた扉の隙間からアレクサンダが「しのびこんで」来たのである。ウイリーは、そっと「しのびこんで」来たアレクサンダにじっと見つめられている。アレクサンダに見つめられているウイリーは、自分の意に反して「ぐるぐる」同じ場所を回り続けることを止められずにいる。こうした状況の中でウイリーは、虚無感を一層募らせると共に、自分自身の滑稽な有り様に恥ずかしさを増幅させていたかもしれない。

## (2) ウイリーの自慢

藤原鈴子は、ウイリーの自慢について、次のように述べている。<sup>10)</sup>

＜ぜんまいねずみ＞のウイリーは、＜アニーのお気に入りのおもちゃ＞であり、みんなに＜ちやほやして＞もらっています。＜白いまくら＞をして＜人形とぬいぐるみのくまの間で＞ねむるほどのかわいがられようです。

藤原は、「ウイリーは、＜アニーのお気に入りのおもちゃ＞であり」、夜になると「＜白いまくら＞をして＜人形とぬいぐるみのくまの間で＞ねむるほどのかわいがれよう」と指摘している。ウイリーは、自分が眠る時でさえも気に掛けてくれるアニーが大好きである。ぜんまいねずみで遊んだり、人形やぬいぐるみの熊を人間と同じようにベットに入れたりするアニーは、まだ幼い女の子であると思われる。幼いだけに気まぐれな行動も多いと考えられるが、ウイリーたちおもちゃにとって、アニーにたくさん遊んでもらえるか否かは最大の関心事である。その点ウイリーは、就寝する時でさえも気に掛けてもらえる程、他のおもちゃよりも特別

扱いをされている存在であり、さらに「白いまくら」をして人形とぬいぐるみの熊の間で眠れるという特権も有している。このようなアニーの特別な愛情に対してウイリーは、一定の満足感を覚え、可愛がられていることを誇らしく思っていたことが分かる。

上西信夫・畠中まり子は、ウイリーについて次のように述べている。<sup>11)</sup>

〈お気に入り〉〈ぐるぐる走る〉〈夜になると…………〉〈みんな、ほくをかわいがってくれるよ〉とウイリーのせりふでくりかえされていることは、①場面のアレクサンダの危険に満ちた世界との対比です。そして、ウイリーのその口調から自分の生きる世界に対して得意になっていることがわかります。

上西・畠中は、ウイリーが「その口調から自分の生きる世界に対して得意になっている」ことが分かる指摘している。確かにウイリーは、自らを「アニーのお気に入りのおもちゃ。」ではなく「アニーのお気に入りのおもちゃさ。」と表現し、「さ」という語尾表現によって伝達内容を強調している。

また、「みんなちやほやしてくれる。」や「みんな、ほくをかわいがってくれるよ。」といったウイリーの発言は、自分が如何に大切にされているかということ、「他者に強く印象づけたい」という思いの表れであると考えられる。

#### IV. 二人の出会い

##### (1) 大事にされていないアレクサンダ

作品本文では、ぜんまいねずみのウイリーの自己紹介を聞いたアレクサンダの反応について、次のように記している。<sup>12)</sup>

「ぼくは、あんまり大事にされない。」

アレクサンダは、かなしそうに言った。でも、友だちが見つかってうれしかった。

アレクサンダは、初対面となるぜんまいねずみのウイリーの自己紹介を、驚嘆と衝撃を伴って聞いたに相違ない。アレクサンダは、アニーの部屋でキーキーという音のするもう一匹のねずみの姿を認め、近づいて声を掛けた。しかしながらアレクサンダは、ぜんまいねずみであるウイリーが、自分自身とは全く異なる生活を送っていることを聞き愕然とする。ウイリーの話聞いたアレクサンダは、初めて「人間にちやほやされる生活」の存在を知ることになるのである。ぜんまいねずみのウイリーが、「おもちゃ」であるというだけで皆から可愛がられるという話は、人間から受ける自分の処遇に常々疑問を抱いていたアレクサンダにとって信じ難い衝撃であった。換言すれば、「みんなちやほやしてくれる。」「みんな、ほくをかわいがってくれるよ。」というウイリーの言葉を通して、アレクサンダは自分自身の置かれている状況を直視することとなったのである。

渥美孝子は、この場面について次のように述べている。<sup>13)</sup>

自分はみんなから好かれているというウイリーの自己規定は、アレクサンダの心に悲しい波紋を投げかけたであろう。あまりに対照的な自己のあり方をつきつけられたアレクサンダは、「ぼくは、あんまり大事にされない。」とつぶやく。だが、「あんまり大事にされない。」どころではない。冒頭の悲鳴やほうきのエピソードは、むしろアレクサンダを〈嫌われ者〉として表象するものであった。とはいえ、自分は嫌われている、と他者に語るのには、余りに惨めすぎる。だから自分を惨めにしない知恵が、「あんまり」というやんわりとした否定形となったのであろう。そして人間から「あんまり大事にされない。」ことの代償



となるのが、アレクサンダにとっては「友だち」であった。「でも、友だちが見つかってうれしかった。」「でも」と彼らは常に自分の欠落への代償を探し当てることで、自分なりの扱いを見出す。言わば、彼らは、「友だち」を得たことで、自己を語るということにつきまとう自意識を抱え込むことになったのである。

ここで渥美は、アレクサンダとウイリーの両者が共に「友だち」を得たことで、「自己を語るということにつきまとう自意識を抱え込むことになった」と捉えている。これまでアレクサンダは、人間から受ける自分の処遇に疑問を持ちながらも、全力で逃げることに必死でその疑問に対してじっくりと向き合う機会がなかった。

また、微少のパンくずを所望しただけなのに、何故自分が嫌われるのだろうかと認識してはいたが、これまで人間から可愛がられる対象を目の当たりにしたことがなかったため、自分自身がどれ程まで忌み嫌われているのかを、相対的に比較することができなかつたのである。それが、ウイリーという人間から可愛がられる存在を前にし、何故自分自身が生命を脅かされる程まで忌み嫌われているのか、という疑問と正対することになったのである。

さらに、アレクサンダがウイリーとの会話から知り得たことは、自分の生活とは全く異なるウイリーの優遇された生活実態であった。アレクサンダは、人間から悲鳴を上げられ、食器などを投げつけられたり箒で追いかけて回されたりして命からがら逃げ惑う生活を送っているが、その一方で、ウイリーは動くたびに人間からちやほやされ、可愛がられる生活を送っている。ウイリーは、寝る時でさえも特別な「白いまくら」を用意され、人形とぬいぐるみの熊の間で眠りに就くのにに対し、アレクサンダは、隠れ家の暗闇の中で独りぼっちといったように、アレクサンダは自分自身が誰からも愛されていないのだということを明確に認識することになったのである。

## (2) ウイリーの「でも、いいさ。」の深層

アレクサンダは、ウイリーの自己紹介の後、台所へ行こうとウイリーを誘っている。作品本文では、次のように記されている。<sup>14)</sup>

「台どころへ行って、パンくずをさがそうよ。」

「ほく、だめなんだ。」

ウイリーは言った

「ねじをまいてもらった時しかうごけない。でも、いいさ。みんな、ほくをかわいがってくれる。」

この場面におけるウイリーの「でも、いいさ。」という一言には、彼自身の複雑な思いが表出されていると考える。西郷竹彦は、この「でも」という言葉の働きについて、次のように述べている。<sup>13)</sup>

ねじをまいてもらった時しかうごけない。〈でも〉という言葉があるということは、後ろの方が強調されるわけですから、ウイリーの認識としては、不自由さよりもかわいがってくれるという方を強調しています。そして、後で読み返してみると、ここにこそぜんまいねずみというものの本質があるのですが、しかし、《たしかめよみ》の段階ではちやほやされる、かわいがってくれる方に重点があると考えた方が自然でしょう。

西郷が指摘するように、「でも」という言葉からは、みんなから可愛がられていることを強調しようとするウイリーの意図が感じられる。ウイリーは、「ねじをまいてもらった時しかうごけない」のである。それを、「でも、いいさ。」と言われると、聞き手はそれが何でも無いこ

とのような印象を受ける。しかし、ウイリーが「でも、いいさ。」と言葉を続けたのは、自分の本当の姿を伝えるだけでは終われない深層が存在していたためではないだろうか。

渥美孝子は、ウイリーの気持ちについて次のように述べている。<sup>15)</sup>

両者の出会いがもたらしたのは、まず第一に、他者に対して自己を語るという経験である。アレクサンダの「きみ、だれ？」と言う問いに対して、ウイリーは自己紹介に加えて、自分が「アニーのお気に入り」であり、みんなにかわいがられる存在であることを語る。「みんなちやほやしてくれる。」「みんな、ほくをかわいがってくれるよ。」という繰り返しに、ある種の虚勢が感じられないでもない。それをウイリーのアイデンティティと言っても同じことであろう。彼の無邪気な自尊心（あるいは無意識の自己防衛）においては、「ねじをまいてもらった時しかうごけない。」ことも、かわいがられることの代償に過ぎず、たいした問題ではないとされる。

「でも、いいさ。みんな、ほくをかわいがってくれる。」。そして語り手もその言葉を保証する、「アレクサンダも、ウイリーが大すきになった。」と。

ここで渥美は、ウイリーが自己紹介に加えて「自分が『アニーのお気に入り』」であることや、「『みんなちやほやしてくれる。』『みんな、ほくをかわいがってくれるよ。』」という繰り返しに、ある種の虚勢が感じられると捉えている。先の西郷が、ウイリーはぜんまいねずみであるがゆえに自由に動けないという認識を重く受け止めていると考えているのに対し、渥美は「ねじをまいてもらった時しかうごけない」ことは、「かわいがられることの代償に過ぎず、たいした問題ではない」と考えている。

しかし、渥美のこの考えは、みんなに可愛がられることを繰り返し話すウイリーを「ある種の虚勢」と位置づけた理由と矛盾している。なぜなら、ウイリーが渥美の言う「ある種の虚勢」を張らざるを得なかった理由には、自分の力で自由に動けないことが大きく関わっているからである。

ウイリーにとってアレクサンダは、他のおもちゃの仲間やアニーとは異なる、別次元の「友だち」であった。そしてウイリーにとって、「一緒に何かしよう。」と他者に誘われたことは初めての経験だったのであろう。ウイリーは、アレクサンダから「台どころへ行って、パンくずをさがそうよ。」と誘われて嬉しくなり、一瞬間、一緒にパンくずを探しに行きたい気持ちになったのではなかろうか。出合ったばかりの「友だち」から誘ってもらった嬉しさ、自分がこれまで経験したことのない「外の世界」へ踏み出してみたいという好奇心から、ウイリーは「うん、今すぐ行こうよ。」と応じたい思いが心底から強く湧き上がってきたと考えられる。

ところがウイリーは、次の瞬間、自分自身が「ねじをまいてもらった時しかうごけない」ぜんまいねずみであるという自らの宿命を思い出してしまうのである。ウイリーは、アレクサンダと一緒に台所へパンくずを探しに行きたいのに、自分の力では一歩たりとも進むことが出来ないばかりか、それを可能にする方法さえも見つからないのである。その一方でアレクサンダは、自分の意思で行きたい所へ自由に移動することが出来る。この時のウイリーは、他者にねじを巻いてもらった時にのみ、しかもバネが伸びきるまでの短い時間だけ動くことができるという「自分自身の制約された世界」を、初めて明確に自覚したのである。ウイリーは、自分の意思で何一つ行動することが出来ないことへのもどかしさ、そうした自分をどうすることも出来ない空しさを感じ、自分自身を全否定するかのようになり「ほく、だめなんだ。」とアレクサンダに告げるのである。

ウイリーは、アレクサンダに「ほく、だめなんだ。」と言って、この場面で初めて弱音を吐くのである。この「ほく、だめなんだ。」というウイリーの発言に留意したい。ウイリーは、アニーに可愛がられておりウイリー自身もアニーが好きであるが、自分とアニーが対等な関係ではないことを熟知している。しかしながら、自分とアレクサンダは対等な関係であると自認している。そのアレクサンダの棲む世界が、自分の棲む世界と比べものにならない位、広大かつ自由なものだと分かったウイリーは、自分の棲む世界が如何に狭小かつ不自由なものであるかを自覚し落胆と絶望感を募らせていたのかもしれない。その思いを払拭しようとした言葉が、「でも、いいさ。」なのではなかろうか。

突如湧き上がってきた自らを客観視する考え方を覆すには、意識的に自分自身を肯定的に見つめなければならない。ウイリーにとってそれは、みんなにちやほや可愛がられていることを自慢することしかないのである。しかしながらウイリーは、「みんな」からちやほや可愛がられることが、いつも受動的であったことに気付いてしまったのである。ウイリーはこれまでのように、自分自身が特別な存在だと純粋に思えなくなってしまっている。自分の意思で、そして自分の力で自由に動けないことが、如何に空虚なことであるかを認識してしまったのである。ウイリーの「でも、いいさ。」に続く、「みんな、ほくをかわいがってくれる。」という言葉は、これまでの自らの力強く堂々とした発言とは異なり、力無くか細いそして悲愴感を伴った音声言語となっているのではないかと考えるのである。

## V. 終わりに

本稿では、「小学校国語教科書教材基礎研究」の一環として、作家レオ＝レオニと訳者の谷川俊太郎、ねずみのアレクサンダについて、ぜんまいねずみのウイリーについて、二人の出会い、について論を進めてきた。今後の研究では、さらに以下の点を中心に考察を進めていきたい。

- 1、ウイリーの囁きについて
- 2、アレクサンダの願い事について
- 3、「友だち」について

## 【引用文献】

- 1) レオ＝レオニ談・松岡正剛訳『問の本』、工作舎、昭和55（1980）年4月25日、98～99頁
- 2) レオ＝レオニ稿「レオ・レオニ イタリアからのメッセージ」、『月刊絵本』二巻3号、盛光社、昭和49（1974）年4月1日、12頁
- 3) 谷川俊太郎稿「レオ＝レオニとの出会い」、レオ＝レオニ作『フレデリック』、好学社、昭和44（1964）年
- 4) 谷川俊太郎稿「レオ・レオニみたび」、レオ＝レオニ作『ペツェッティーノ』、好学社、昭和50（1975）年
- 5) 『小学国語 2下』教育出版、平成14（2002）年6月20日、76頁
- 6) 上掲書、76頁
- 7) 前掲5) の文献、77頁
- 8) 竹内みち子稿「教材分析と指導計画『アレクサンダとぜんまいねずみ』」、『国語の授業』

104号、一光社、平成3（1991）年6月5日、18頁

- 9) 西郷竹彦稿「アレクサンダとぜんまいねずみ（レオ＝レオニ）」、『西郷竹彦文芸・教育全集第八巻 文芸の世界Ⅱ 童話・物語』、平成8（1996）年9月10日、201～202頁
- 10) 藤原鈴子稿「『アレクサンダとぜんまいねずみ』の授業」、西郷竹彦監修『新版 文芸の授業 小学校2年』、明治図書出版、平成9年（1997）年4月、113頁
- 11) 上西信夫・畠中まり子文責・松戸文芸教育研究会著『文芸研・教材研究ハンドブック 4 レオ＝レオニ作谷川俊太郎訳＝アレクサンダとぜんまいねずみ』、明治図書出版、昭和62（1987）年3月、16～17頁
- 12) 前掲5) の文献、78頁
- 13) 渥美孝子稿「羨望と共感・『友だち』という関係性—『アレクサンダとぜんまいねずみ』—」、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編二年』、教育出版、平成25（2013）年3月15日、90～91頁
- 14) 前掲5) の文献、78頁
- 15) 前掲13) の文献、90頁

## A Researching Leo Lionni through Japanese Language Teaching Materials “Alexander and the Wind-Up Mouse”

Hiroshi OHTSUKA

(Received October 3, 2016)

### Abstract

Leo Lionni (1910-1999) was born in Amsterdam, Republic of United Netherlands . The first recorded example of his work *Alexander and the Wind-Up Mouse* ran in 1969 edition of Pantheon Books.

Later, in 1969, he had his first work, *Alexander and the Wind-Up Mouse* officially published. A fuller, revised version *Alexander and the Wind-Up Mouse* was included.

The textbook version of *Alexander and the Wind-Up Mouse* was published by Kyouiku Publication in 1980 . It was selected for the first time as a teaching material for students aged 8 years or older. Since 1980, the textbook has been reprinted a number of times.

The main issues examined in the research of Leo Lionni, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of *Alexander and the Wind-Up Mouse* and those in the school textbook version.